

『毎日のことごと』

9月15日の

「ラジオ深夜便」で 紹介されます(5分間の朗読あり)



書店名

ご担当

今朝は、霧。

窓の外がまっ白に膨らんで、空も海も街も見えませんが、さすがは梅雨のまつただなか、街の方から見たら、私のいるマンションは山ごと霧に包まれて何も見えないんだらうな。

濃い霧に覆われると、耳が遠くなったような感じがします。街の音も、私が立てる生活の音も、何もかもが吸い込まれ、茫々とした静けさに包まれるのです。まるで、体ごと霧に埋もれてしまったみたい。雪の日にも似ているけれど、どこか違う。なんだか目に見えない大きなものに、抱かれています。

こんな日は自分にもぐり込み、書きものをする日和なので、午後もずっとパソコンに向かっていました。

お茶をいれるついでに二階に上ってみると、洗濯もの(きのうは午後から)

雲ゆきが怪しくなり、干しっ放しにしておいたのです)は乾いているような、いないような。

それでふと思いつき、アイロンをかけることにしました。タオルでも布巾でも、シャツでも下着でも、片っ端からアイロンを当て、そのへんに広げておけば乾くんじやないかと思って。

ああ、洗濯もののいい匂い。そういえば子どものころ、母も雨の日にこんなことをしていたっけ。

今はもうとり壊され、あとかたもなくなった



古い家の居間で、なま乾きの体操着や、給食の白衣にせつせとアイロンをかけている母。洗濯ものから上がる蒸気で、ジュッという音がします。父は、炬燵の上でお手本を見ながら習字を書いていました。墨をする音、ざあざあ降りる雨の音、柱時計のチクタクチクタク。兄も姉も遊びにいらっていて、居間には父と母と三人きり。私は腹ばいになり、絵本を読んでいた。テレビではマラソン選手が延々と走り続けています。

そのとき私は、たまたまなく幸せな気持ちと、哀しい気持ちを同時に味わっていました。このままずっと、雨がやまないといいのに、マラソンも終わらなくて、お母さんのアイロンがけも、お父さんの習字もずっと、

ずっと、いつまでも続くといいのに。今というの少しあとにはなくなって、決してもとに戻らないこと。父も母も、いつかこの世からいなくなってしまうこと。小さいながらも私は、どこかで知っていたんだと思うんです。雨の日のアイロンの思い出は、昭和に開かれた「東京オリピック」の年。マラソンの先頭を走り続けていたのは、エチオピアのアベベ選手。父も母もまだ30代で、私は小学二年生でした。

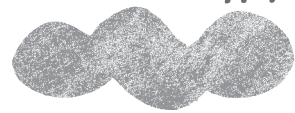
「雨とアイロン」より

神戸での暮らし、神戸の人々のことを 愛情たっぷりに描いた 高山なおみ最新刊 『毎日のことごと』

46変形 上製 196ページ
定価：本体 1,800円+税
978-4-910387-09-3 C0095

料理家として、文章家として多くの著書をもつ高山さんが生活の場を東京・吉祥寺から神戸へと移したのは2016年のこと。神戸での新しい暮らし、新しい友人との交流を描いたエッセイ36編。

信陽堂の本



ご注文・お問い合わせ fax **03-6685-4888**

または メールでお気軽にどうぞ

books@shinyodo.net



メールオーダー

〈取引方法 以下からお選び✓を入れてください〉

- 直取引
- トランスビュー BookCellar
- 鎌谷書店
- 子どもの文化普及協会



信陽堂

〒113-0022 東京都文京区千駄木3-51-10-2F

お問い合わせ tel. 03-6321-9835 books@shinyodo.net [担当:井上]